

# 沖縄県立図書館・空とぶ図書館体験 in 粟国島 —青山学院大学「地域実習 G2」報告

青山学院大学コミュニティ人間科学部地域実習 G2メンバー

## はじめに

青山学院大学(相模原キャンパス)に 2019 年度に新たに設置された「コミュニティ人間科学部」では、学部のミッションである「地域を活かし、地域で生きる、実践知の修得」を目指すための総まとめの必修科目として、3 年生が受講する「地域実習 G2」を開講しています。この科目は、国内各地に学生たちが派遣され、それぞれの地域で文化的な体験を行う実習授業であり、実習先の1つとして「沖縄県」も設定されています。

2021 年度の地域実習では、沖縄県立図書館のご厚意により、2021 年 11 月 13 日(土)～14 日(日)にかけて、粟国島にある粟国村離島振興総合センターにて開催された「空とぶ図書館」(沖縄県立図書館による図書館未設置地区への移動図書館サービス)に同行させていただくことになりました。



【実習開始直前の学生たちの様子】

本レポートでは、青山学院大学の非常勤講師として、沖縄各地での実習のコーディネートにあたった山口(※沖縄国際大学司書課程担当)が、沖縄県立図書館での 3 日間のプログラムの内容と、参加した学生(7 名)たちの様子を実習簿や感想レポートをもとに紹介します。

## ■企画展示のテーマ検討と選書体験

実習初日にあたる 11 月 12 日(金)は、館長室を訪問し、実習受け入れのお礼と、3 日間の実習に向けての抱負を 1 人ずつ宮城館長へ伝え、激励の言葉をいただいた後、夕方 5 時まで、沖縄県立図書館内の広域サービス室にて、「空とぶ図書館」の意義を学び、翌日からの粟国村での実習の準備を行いました。



【宮城館長へ受け入れのお礼と抱負を伝える】

学生たちには、来沖前の事前学習も 1 つとして、『みんなの図書館』(図書館問題研究会刊)に掲載された「空とぶ図書館」の取り組みをまと

めたレポートに目を通すように指示していました<sup>1</sup>。その上で、広域サービス室のスタッフである呉屋さんより、沖縄県立図書館が「空とぶ図書館」とう活動に取り組む意義をご説明いただき、①図書館未設置地区の県民の知る権利の保障、②図書館を設置してほしいというニーズの掘り起こし、といった意義があることを学びました。また、沖縄県内では図書館未設置地区ほど、書店やコンビニなど、本を気軽に手に取れる場所がない地域が多いということ、さらに、同じ沖縄県とはいえ、地域ごとに読書のニーズや移動図書館を受け入れる態勢に違いがあることなども教えていただきました。



【企画展示のテーマをプレゼンテーション】

レクチャーの後は、7名の参加学生を2グループに分けて、12月以降に開催される予定となっている【西表島西部】と【与那国島】での「空とぶ図書館」での資料展示のテーマを考えて提案する、というワークを行いました。学生たちは出発前にさまざまな情報源を使って両島の特性や課題を学んだ上で、西表島西部のグループは島内に大きな病院がない(診療所しかない)という特性をふまえて、日々の食や運動などを気づかい、島の医療体制に負担をかけない生活を送ることができるように「健康」を主なテーマとした展示

企画を考案することとなりました。一方、与那国島のグループは、与那国島の基幹産業が漁業であること、そして、漁業において多くの課題が見つかったことに注目して、海岸のごみの漂着問題、漁獲量の減少など、海の環境問題を考えてもらうためのテーマとする展示企画をメインで提案することになりました。これらのテーマの下で、それぞれのグループで、広域サービス室内の書庫の資料からテーマに合うものを集める作業を行いました。選書の作業中には、海の環境問題についての子ども向けの資料の選び方に難航していたところ、「海の動物のこについて書いてあるの本に出てくるかも?」「少し視野を広げて集めてみては?」といった的確なアドバイスもいただきました。



【書庫内の資料からテーマに合う資料を探す】

ここで学生たちが考えたテーマと集めた資料は実際に、11月末から12月に開催される西表島と、与那国島での移動図書館の際に、「青山学院大学の学生たちが選んだ本」として展示していただけることになりました。その様子は、沖縄県立図書館のツイッターで後日紹介されていたので、こちらに転載させていただきます<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 上原望生「すべての島んちゅに本との出会いを：沖縄県立図書館「空とぶ図書館」と広域サービスについて」『みんなの図書館』534, 2021.10, pp.59-63

<sup>2</sup> 「沖縄県立図書館 Twitter」

<https://twitter.com/OkinawaPrefLib>, 11月27日9時43分ツイート(西表島)、12月11日14時7分ツイート(与那国島)



【与那国島・西表島での展示の様子】

■おすすめ本のPOPづくり

事前学習のもう1つの課題は、粟国島へ持参するおすすめ本の選定と、POPづくりでした。広域サービス室では、同じようなワークを、県内の中高生向けのインターンシップ(職場体験)の受け入れの際にも行うことがあるとのことで、当初は学生たちが個人的に好きな本を紹介してほしい、という内容でしたが、日々、地域課題について学んでいる学生たちの専門性を生かし、公共図書館が持つ社会教育機能を意識しつつ、粟国島の地域課題をふまえて、その解決につながるような観点で本を選ぶようにと伝えることにしました。学生たちが選んだ本は次のようなものでした(出版年順)。

- 『中学受験オンライン学習法—合格への秘訣』(風鳴舎, 2021)
- 『ミミズーちっちゃな生きものたち』(化学同人, 2021)
- 『ジュリアンはマーメイド』(サウザンブックス社, 2020)

- 『知識ゼロでも楽しく読める宇宙のしくみ』(西東社, 2020)
- 『ゲナポッポ』(白泉社, 2020)
- 『図解でわかる 14歳からのプラスチックと環境問題』(太田出版, 2019)
- 『塾まかせが子どもをつぶす—自分から勉強する子の育て方』(大和書房, 2019)
- 『島嶼学への誘い』(岩波書店, 2017)
- 『雑談力』(PHP, 2016)
- 『イルミネイチャー 3色のマジックレンズで、180の動物をさがせ!』(河出書房新, 2016)
- 『エイサーだいこちむどんどん』(ジグゼコミュニケーションズ, 2014)

『ジュリアンはマーメイド』を選んだ学生は、次のように理由をレポートに書いてくれました。

「この本は、おばあちゃんと水泳の帰りにマーメイドの格好をしたお姉さんを見て、その姿に憧れる男の子のお話です。この本を選んだ理由としては、私自身に「マーメイドは女の子であり、女の子が憧れるもの」という固定概念があったからです。しかし、この本はそんな私の凝り固まった概念をストーリーの序盤から打ち壊し、また男の子がマーメイドに憧れるという事実を淡々と、また当たり前で描いています。子どもたちに「男の子だから、女の子だから」という理由で自分の好きなものを見失ってほしくないと思い、この本を選びました」

同じ学部で地域の課題を学んでいるといっても、一人ひとりの専門性は、伝統文化の継承、高齢化、環境問題、社会教育など多様です。それぞれの専門性を生かして、自然環境問題、教育問題、人口問題、伝統文化の継承、ジェンダーフリーなど、多様な視点から本を選んでいることが分かるラインナップとなりました。





冊読むのにどのくらい時間がかかるのかを確認しつつ、読むのに時間がかかる絵本は別のメンバーが持ってきた絵本に差し替えることにしたり、広域サービス室の西村さんに絵本の持ち方や声の出し方、絵本を使って子どもたちとコミュニケーションを上手にとる方法などもレクチャーしていただきながら、練習を進めていきました。



【完成したPOPを持って記念撮影】

実習初日はかなりタイトなスケジュールとなり、POPが完成した後、息つく暇もないまま粟国島で行うおはなし会の練習・打ち合わせを行いました。学生たちには事前ガイダンスで、「粟国島の子どもたちに読んであげたい絵本をもって来るように」と指示していました。多い学生で4冊ほどの大きな絵本を旅行鞆に入れて頑張って持ってきてくれましたが、学生の多くがこれまでに絵本の読み聞かせの体験がなかったこともあって、おはなし会で使うにはやや長めの物語絵本を持って来る学生が多くなってしまいました。そこで、1



【おはなし会の練習の様子】

このように慌ただしかった初日の実習を終えて、学生たちは次のような科の感想を実習簿や感想レポートに書いてくれました。

園「POPづくりを通して、利用者の方にとり手にとってもらえるか、効果的なデザインや目を引く紹介文をあれこれアイデアを出しながら考えるのがとても楽しかったです。本をいろいろ選んでいるうちに、自分が欲しくなってしまう。そういう本が書庫にたくさんある沖縄県立図書館はすごいなと思いました」

園「POPづくりを通して、1人1人に本を届けるためにこんなに手間をかけているんだなあと思いました。これからは、図書館に行った時に

POPにももっと注目したいなと思いました」

☐「企画展示では、内容がわかりやすく、新しい本を集めないといけないということを教えていただきました。自分が面白いと思った本を一つ一つ探しがちだったので、サービスの場面では、常に利用者の立場から物事を考えることの大切さを学びました」

☐「子ども向けの資料として、展示用に絵本をテーマ別で選出しようとしたときに、絵本は内容で分類されていないので選書が難しいと感じました。分類記号がある本でも正しいテーマで選書するには全ての本の内容を確認する必要があり、予想以上に時間と労力がかかったので、移動図書館の度に選書しているスタッフの皆さんの大変さと専門性を感じました」

☐「企画展示の選書の際、スタッフの方々から、「この街の人口構成は～、主要な産業は～」と何も見ずに詳しく教えていただくことが多くて驚きました。県立図書館は大きな図書館というイメージしかありませんでしたが、諸地域の情報も的確に抑える必要性があると知りました」

#### ■フェリーで出航、「空とぶ図書館」の開館準備

11月13日(土)は、朝8時30分に泊港のフェリー乗り場に集合し、広域サービス室の上原さんと西村さんとともに、粟国島へ出発しました。前日からの低気圧の通過の影響で、かなり波が高く、ジェットコースターのように船が大きく揺れる中での移動となりましたが、若い学生たちはおおね元気で、大きく体調を壊すことなく、到着後すぐに移動図書館の開館準備に取りかかることができました。

離島や北部地区での「空とぶ図書館」の実施に当たっては、沖縄県立図書館から実施自治体へ事前に約900冊の図書を送付しておき、会場までの運搬を自治体の担当の方に依頼することになっています。そのあとの、会場で机を出して、段ボールから資料を取り出して並べる作業は、

図書館側で行うことになっているのですが、今回は粟国村教育委員会の担当の方がすでに机だけでなく、資料のセッティングまでほぼ完璧に行ってくださっていたので、準備作業はそれほど時間をかけることもなく完了することができました。



【開館準備の様子】

#### ■「大学生がえらぶ本」コーナーの取り組み

前日の実習で作成したPOPとおすすめ本は学生各自が粟国島まで持参しました。

会場では、入口の最も目立つ場所に「青山学院大学生がえらぶ本」というコーナーを作ったいただき、コーナー専用のパネルを飾ったり、テーブルの上に明るい色のクロスを敷いたりして、雰囲気盛り上げていただきました。



【学生たちのおすすめ本の展示コーナー】

学生たちがPOPを作ってコーナーに置いた本のうち、2日間の移動図書館で貸出がされたものは5冊でした。粟国島には1人、1~2冊ずつ、合計11冊を持参しましたので、これはやや寂しい数字です。移動図書館終了後に開いた反省会では、なぜ本があまり借りられなかったのかを話し合ったところ、「内容がちょっと難しかったかも」「来てくれる人と本のテーマがマッチしてなかったかも」といった声が上がりました。

事前学習をふまえて、粟国島の地域課題の解決に幅広くつながるような選書を行いました。その課題を抱えている層が必ずしも図書館の来館者層と重なるわけではありません。学生たちとの反省会を通して、選書の際には、地域課題をとらえつつ、普段はどのような層が移動図書館を利用するのか、という要素も加えなければならぬことに気づかされました。

#### ■子どもたちとの交流・おはなし会の体験

初日も2日目も、開始前から待ちかねた子どもたちが入口にたくさん集まってくれていました。粟国島での空とぶ図書館の開催が島の恒例の行事になっている様子が伝わってきました。開館すると、いつもの移動図書館とは違って、見知らぬお兄さん・お姉さんが大勢いることに子どもたちは驚きつつも、照れくさそうに近づいてきてくれて、「何年生?」「本が好きなの?」「いつも来てくれるの?」と学生が話しかけると、どの子どもも素直に返事をしてきて、そこから、東京のことや大学生活のことなどを興味深そうに聞いてくれたりもしました。友達の付き合いで会場に来たある男の子は、本にはあまり関心を示さず、退屈そうにしていたかと思ったら、いつの間にか、男子学生を誘ってキャッチボールをして遊び始めていました。

沖縄県内では、他の離島もそうですが、粟国島には高校がなく、島の子どもたちは15歳の春になると海を渡って本島の高校へ旅立ってしまいます。島内には学生たちのような世代の若者

は少なく、子どもたちもお兄さん、お姉さんたちと交流できることがうれしかったのかなとも感じました。そうしたコミュニケーションの中で、学生たちにも、「1学年に8人しかいない」「学年関係なくみんな遊んでいる」といった、島の子どもたちの生活を興味深く聞いている様子がみられました。移動図書館が資料・情報を届けるだけでなく、人と人、地域と地域の交流をうながす役割があることも学ぶことができたように思います。



【だんだんと近づいてきてくれる子どもたち】

前日に練習をしていた「おはなし会」は、初日の15時からと、2日目の10時から、2グループにわけて、それぞれ30分かけて実施しました。

初日は、小学校高学年の子どもたちが多く、準備してきた幼児向けの絵本の年齢層とはマッチしなかったため、急遽その場にある絵本を選んで、どちらの本を読みたいか、など聞いて対応することにしました。子どもたちに選んでもらった絵本の中には、学校の図書館で読んだことがある絵本も含まれていたようでしたが、読んだことがある絵本をもう一度読んでほしいという声の方が多かったりして、好きな絵本は何度でも、いろいろな人から読んでもらっても楽しいものだということを改めて実感しました。参加者が少なかったこともあって、子どもたちに近づいて話しかけたりして、とても和やかな会になりました。

2日目は、小学校入学前の小さな子どもがきてくれて、初日とは違って、準備していた絵本が難しすぎるかも?ということになりました。そこで



順番を少し入れ替えて、まずは、物語を楽しめる絵本を読み、その間に、近くにあった絵本から、いっしょに参加できるような絵本を選んで、大急ぎで練習をすることにしました。『のりものつみき』（講談社）と、『やさいのおなか』（福音館書店）は2冊とも子どもたちに大好評。思いがけない答えが飛び交い、子どもたちの自由な発想にたびたび驚かされました。



【おはなし会の様子】

楽しい物語と遊べる絵本の間には、『へいわってどんなこと?』（童心社）も読みました。就学前の子どもにとってはやや難しい内容かなとも思いましたが、一生懸命聞き入っている様子が後ろから見えて、とてもよいおはなし会になりました。

移動図書館は、初日は午後2時からスタート

して19時まで、翌日は9時からスタートして12時まで開館しました。閉館後は、資料の箱詰め、会場の片づけ、清掃などを行いました。すべて終了した後、貸出冊数の集計を行ったところ、211冊が借りられたことが上原さんから報告され、大いに盛り上がりました。

来館者は特に2日目の方が多かったのですが、初日の学生たちの読み聞かせや、手が空いている時間帯に島内をのぼり旗を持って回って、子供たちに声をかけた効果があったのかもしれない。実際に、初日の夕方に声をかけた子どもたちが何人か会場に来てくれていたようです。



【のぼり旗をもってコマーシャル】

粟国島での宿泊実習を終えて、学生たちは次のよう感想を寄せてくれました。

図「“図書館のない地域に住む人々は図書館があること、本が身近にあることが当たり前ではない。この活動を通して誰もが本に触れて欲しいと思っています”という、事前学習でうかがったスタッフの方の言葉が実習中に何度も頭をよぎりました。図書館がない粟国島では住人が情報を得るにはインターネットが主になってしまいますが、インターネットは自分が検索をかけるため情報が偏っています。しかし多くの本を目にし、手に取って実際に見ることで島民の視野が凄く広がるのではないかと感じます。いつか粟国島にも図書館が設立されたいなと感じました」

図「“図書館内とはいっても、普通の図書館とは違

って私語禁止というわけではないので、子どもたちが話しながら楽しそうに本を選び、貸出カウンターで移動図書館員の人たちと楽しそうにコミュニケーションをとっているのが印象的でした。移動図書館にはさまざまな役割があることを学びました」

㊦「島の方々が上限いっぱい15冊の本を借りていってくださるのを見てとてもうれしくなりました。島の方々に話を聞いたところ、図書館設立には未だ多面的に問題はありますが、粟国島にも早く図書館ができれば…とより強く感じました」

㊦「今回の沖縄県立図書館と粟国島で空とぶ図書館の活動に携わり、本が人々にとっていかに重要なものであるか改めて実感することができました。本は一人で静かに読み、自分だけの異世界に入り込むことができる、その一方で、読み聞かせのように会話を交えながら複数人で楽しむこともできます。本は単に知識を得るためだけではなく、物語を楽しんだり、人々の交流を促したり、無限の可能性を秘めていると感じました」

㊦「島の方々に楽しそうに本や特集を閲覧して頂いたり、何冊も借りて頂いている様子を見ることでこの活動の必要性や、何よりも図書館や本の素晴らしさを感じることができました。就職活動が終わったら今度はボランティアとしてこの活動に参加したいねとメンバーで話し合っています。それ程、私たちにとって得るものが多い時間でしたし、何よりも楽しく活動をさせていただきました。粟国島の方々は本当に優しくて、すれ違った際も笑顔で挨拶をして頂いたり、自然を感じる環境で活動ができたことは東京に住んでいる私たちでは経験することのないことばかりでした。粟国島がすっかり好きになりました」

㊦「私が住んでいる埼玉県では図書館があるのが当たり前で本という存在価値を実感できていませんでした。しかし、今回の実習を通して、デジタルではなく実物の本があることで子どもやその親、地域住人が集まり新たなコミュニ

ティが形成されるという本の存在価値を目の当たりにしました。大人や子ども、高齢な方など様々な人に対して日本のどこに住んでいても本を手にする機会を平等に与えていく環境を整えていかなければならないと思いました。今回学んだ本の大切さを私の親戚の子どもたちや自分に子どもが生まれたら伝えていこうと思います」

## おわりに

今回の沖縄県立図書館と粟国島での実習は、昨年から長く続いた「コロナ禍」の影響もあり、実施の見通しをなかなか立てることができませんでした。そのため、事前学習の機会も十分には設定できず、また、学生たちも、昨年一年間はほぼオンライン授業となり、3年生になってからは大学へ入構する機会も戻ってきましたが、反対に、取得する単位が2年生ほどには多くないため、7人全員が顔をそろえる機会がほとんどないまま、実習がスタートすることになってしまいました。彼らを現地で受け入れる側としては、1人1人の様子もよく分からず、チームワークの面でかなり不安があったのも事実です。

ただし、事前の準備が十分にできなかった分、沖縄では、選書、読み聞かせ、ポップづくり、ソーシャル活動など、様々な課題をこなさなければならず、学生たちがもともと持っている学びに対する意欲やポテンシャルの高さ、そして、1日1日、1分1秒ごとに学生たちの距離が近づいていく姿を見ることができました。



【移動図書館終了後の学生たちの様子】



コロナ禍で、私自身も長く学生たちの笑顔を見ていないような気がしましたが、粟国島から出航する頃には、マスク越しでも、実習初日のかたい表情はすっかりほぐれて、充実した様子を見ることができました。

青山学院大学のコロナ対応方針によると、地域実習の実施 1 か月前までに、相模原キャンパスがある神奈川県、または実習先に、国の「緊急事態宣言」が発出されている場合は実施を延期するという指示が出ていました。幸い、神奈川県、沖縄県ともに 9 月末には宣言が解除となりましたが、その時点で実施までの時間は 1 か月と少ししかありませんでした。この間に、実習受け入れに向けての最終調整を各機関と行うことになりましたが、そうした厳しい状況の中でも、学生たちをこころよく受け入れてくださった沖縄県立図書館の宮城館長、広域サービス室の上原さま、西村さま、呉屋さまをはじめとするスタッフの皆様、心からお礼申し上げます。粟国村教育委員会の皆様にも、島のお土産を頂いたり、島内の名所の散策に連れて行っていただくなど、大変お世話になりました。

地域実習は全体で 5 日間のプログラムとなるため、はじめの 3 日間は沖縄県立図書館で、残り 2 日間は「沖縄伝承話資料センター」にて地域文化の継承をテーマとした取り組みを行いました。これは、沖縄の伝承玩具づくり(しし玉のブレスレットづくり)を学び、沖縄の昔話「犬の足」を覚えて、普天間第二小学校の 1・2 年生のクラスにおもむき、「昔遊び」のゲストとしてレクチャーするというプログラムです。今回のレポートではその活動内容については十分に触れることができませんが、県立図書館での実習経験を糧にして、1 時間の授業をしっかりとこなしてくれました。この実習でも、沖縄伝承話資料センターの照屋理事長、大田理事、宜保さんや新城さんをはじめとするスタッフの皆様、普天間第二小学校の知念校長先生、1 年生学年主任の名幸先生、2 年生学年主任の當間先生、学校事務の大城さん

など、たくさんの教職員の皆様にもサポートをしていただきました。この場を借りて心からお礼申し上げます。

学生たちが今回の地域実習での学びや出会いを、大学での学びやこれからの長い人生の中で豊かに実らせてくれることを願っています。(2021 年 12 月 4 日)



【普天間第二小学校での昔遊びの授業参加】

まとめ：山口真也(沖縄国際大学司書課程・青山学院大学非常勤教員)